



「海の科学がわかる本」

藤岡換太郎 編著

成山堂書店, 2010年10月

216頁, 1900円 (本体価格)

ISBN 978-4-425-53121-9

2011年3月11日は、我々にとって忘れ難い日となった。その日の昼下がり起こった東北地方太平洋沖地震では、3週間たった今でもその被害の全貌は明らかでなく、原子力発電所での事故は、収拾のめどさえ見えない。地震に伴って発生した津波が、すべてを飲み込んでしまった。この未曾有の出来事を目のあたりにした時、海について、もっと知りたい、知らなければ、と思うのは私だけではないだろう。

海という身近な題材について、実に様々な見地から研究がなされている。海洋学自体、物理、生物、化学、地学といった自然科学と呼ばれる分野にとどまらず、国際政治学、経済学、法学にまで跨った複合領域である。だからと言ってよいものか、自然科学の領域に限っても、海に関する最新の研究結果をわかりやすく網羅的に解説した本は稀である。「海の科学がわかる本」はそんな一冊で、しかも日本語で書かれている。一般向けの啓蒙書として、気象、海洋学を学ぶ学部生向けの副読本として、または、気象に係わる大学院生、そして研究者にとって、海洋学という裾野の広い学問領域の研究動向をよりよく知るための窓口として、この一冊を書棚にという人は多いだろう。このような本がもっと早く出ていればよかったと思う。

本書は、序章で書かれているように、「海洋と地球の学校」という、長年、海洋研究開発機構が行ってきた、大学生、大学院生、一般の方々を対象とした地球システム科学についてのセミナーでの講義内容を整理したものである。成り立ちとして、幅広い分野を分かり易くという、時には相反する命題をみごとにクリアしている。

内容について少し説明すると、はじめに地球史全体を俯瞰することで、地球システムにおける海の重要

性、地球科学の階層構造などについて分かり易く解説している。その後は、おおむね、物理、化学、生物、地学の順番で章が構成されている。物理の部分では、エルニーニョ現象を中心とした熱帯についての解説に続き、中緯度、高緯度について、とくに大気-海洋相互作用という視点から、気象、海洋の物理現象を捉える上で重要な、波の概念が分かり易く解説されている。あえて化学海洋と銘打った章では、炭素循環の観点から、将来にむけた様々なシナリオが分かり易く整理されている。生物に関しては2つの章を割り、まず深海における生態系の説明と、微生物に関する話がまとめられている。

残りの部分は、南極、北極、そして海洋観測に使われる様々な測器と、海洋観測の最前線に関する情報が満載である。深海についても言えることだが、海洋観測は冒険的であるとか、フロンティアという側面を残している。極域での海洋観測など、実にそのものごと実感できる。

本書を読んで、私が特に興味をひかれたのは、基本的な概念をどのように簡単に分かり易く説明しているかと言う点と、比較的異分野についての2点で、前者に関しては、例えば「地向斜造山論」から「プレートテクトニクス」、「ブルームテクトニクス」にいたるスムーズな説明をなるほどと思い、後者では、微生物に関する様々な話を、とても面白いと感じた。

全体として、「お奨め」の一冊ではあるが、いくつか残念な点にも気がつかされた。1つは、もともとカラーだった絵が白黒になることで、随分損をしている。この点は素直に勿体ない気がした。もう1点は、本書のなかで津波の説明がないのは、なぜだろう、という素朴な疑問が残った。いろいろな要因が考えられなくも無いが、本書の成り立ちからして、たまたまなのかもしれない。最後になりましたが、この場をお借りして、震災にあわれた方々には一日も早いご復興を、そしてお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(新潟大学自然科学系 浮田甚郎)